恐ろしかった。ああ、巫女に術を習ってさえいれば。精霊に助けを求めることだって、できただろうに。

　またしてもその思いがアリューシャの頭をよぎった時だ。青くまたたくディネイの卵を見つめながら、忌み人が熱っぽくつぶやきだした。

「ディネイの胎児の血は強力だ。どんなまじないにも呪いにも勝る。ことに、心臓にはすばらしい力が満ちている。……卵は手に入れた。過去とつながりのある子どもらも。あの人を取り戻すのに必要なものは、全て揃ったんだ」

「あ、あの人？」

　戸惑うアリューシャの前で、忌み人はその場に膝をつき、足元の黒い土を愛おしげに撫でた。

「ここにね、私の恋人が埋められているんだよ。二十八年前にシャン族に殺された、私の恋人がね」

　すうっと、冷たい風が一瞬吹いた。

　アリューシャの毛穴から、じっとりとした汗がふきだした。それでわかった。どうしてそこだけ草がはえていないのか。悪しきものをとりこんだ土を、草木は嫌う。鳥や獣もよりつかない。ということは、ここに埋められているのは罪をおかした人間で、その邪悪な魂はいまだこの世にとりついているということなのだ。

　忌み人は土をひとつかみとって器に入れ、さらに奇妙な草の根をつぶして、ねりあわせ始めた。そうしながら、それまでとは違う女らしい言葉づかいで、ゆったりと話しだした。

「私はね、幼い頃から偉大な巫女になると期待されていたの。……いやだったわ。みんなに言われるままに、修行は積んだけど、もっと別な生き方がしてみたい、楽しいことがしたいって、いつもそう思っていたわ」

　アリューシャはどきりとした。この話。まるでアリューシャ自身のことを言っているかのようだ。自分と忌み人が似ていることに、アリューシャは大きな衝撃を受けた。

　蒼白になる少女にかまわず、忌み人は話し続けた。

「そして、十七歳の春、恋をしたのよ。相手は交易のために里にやってきたケーン族の若者で、一目見た瞬間、この人こそ伴侶だと、互いに感じあったわ」

　瞳を熱く潤ませた忌み人は、これまでよりもずっと若々しく見えた。美しささえ一瞬かいま見えたほどだ。

「私たちは、それぞれ一族と里を捨てて、手を取り合って逃げ出したわ。でも、途中でシャン族に追いつかれてしまった。あの人は殺され、私は足を砕かれ、死人守の穴に放りこまれた。巫女でありながら、一族を裏切ったということでね。まったく。巫女になどなるものではないわね」

「嘘だわ！」

　はじけるようにアリューシャは叫んだ。

「いくら巫女だからって、男の人と逃げたくらいで忌み人